ジュリアン・グリーンにおける神秘体験の諸相

浅岡 夢二

I　はじめに

ジュリアン・グリーンはフランスの作家の中で、生前にその作品がプレイアッド叢書に収められた唯一の作家である。その数、全八巻。長編小説、中・短編小説、戯曲、エッセイ、評論、自伝、日記、対話など、すべてを合わせると、聖書並みの活字の組方で、およそ一万一千二百数十ページに及ぶ。途方もなく多産な作家だと言えるだろう。

本稿では、グリーンが残した作品のうち、自伝、日記、対話などのノン・フィクション作品を選び、それらの中で語られている様々な神秘体験について考察し、人間が秘めている精神的な可能性を探求してみたい。

ジュリアン・グリーンは、１９００年9月６日にパリに生まれた。両親は、ともにアメリカ南部の出身で、１８９３年よりフランスに定住していた。きょうだいは全部で七人、一番上と末子のグリーンが男で、あとはぜんぶ女である。両親はともにプロテスタントで、父親は長老派教徒、母親は監督派教徒であった。当然、グリーンもプロテスタントとして、母親から、福音書を読むことを中心にした宗教教育を受けた。しかし、母親が、１９１４年１２月２７日に死去。父親はその年の８月１５日にカトリックに改宗し、グリーン自身も翌々年の１９１６年４月２９日にカトリックに改宗している。

その後、熱烈なカトリック信者として生きるが、１９２２年以降はカトリック信仰から離れ、１９２４年には痛烈なカトリック批判の書『信仰の卑俗化に抗して：フランスのカトリック信者へのパンフレ』を出版した。しかし、様々な苦悩を経た後、１９３９年に、決定的にカトリック教会に回帰することになる。生涯にわたって膨大な作品を書き続け、１９９８年8月１３日、９８歳になる日を目前にして死去した。

夥しい作品を残したグリーンは、一方でまた、夥しい神秘体験を繰り返し経験しており、それらについて詳しい記述を残している。しかし、言葉に関するプロ中のプロとして大作家とも言える業績を残したグリーンにして、神秘体験を語ろうとする時、それらを言葉で説明することができなかった。それは、ウィリアム・

ジェイムズも指摘するように、そもそも神秘体験が「表現できない」ものだからである（1）。この「表現不可能性」（2）に関してグリーンが使っている言い回しを、以下、アトランダムにあげてみよう。

「人間の言葉では描くことのできない」
「われわれの言葉を越えている」
「説明できない」
「言葉では表せない」
「名付けようのない」
「描くことはできない」
「何も説明できない」
「分析されないし、描かれない」
「言葉で描くことも説明することもできない」
「言葉では言い表せない」
「言いようのない」
「人間の言語の限界を越えている」
「言語を絶した」
「言葉では表現できない」
「言うに言われぬ」
「人間の言語によっては名付けようのない」
「いかなる言葉にも表現されない」
「言葉にはならない」
「言葉に表すことのできない」
「どんな言葉にもよく翻訳することができないほど深い」
「言葉には言い表し得ない」

とはいえ、グリーンはやはり文章表現のプロである。詳しく語られる前後関係、また、その文章の精緻さによって、我々は、彼が経験した神秘体験をある程度まで推測することができる。

それでは、まず、グリーンの神秘体験の中から、ウィリアム・ジェイムズが神秘体験の特徴としてあげた「四つの標識」を備えたものを二つ選んでみよう。

まずは、八歳の時に、ジャンソン高等中学校の教室において経験した神秘体験である。

窓から外を眺めていると、（中略）ぼくは突然ぼくを襲った不思議な歓びに捉えられたのだ。ぼくは言葉では表現できないその状態のうちに数分間とどまっていたように思う。ぼくの周囲で起っていることがもう何もわからず、なかんずくなぜ自分がこんなにも幸福に感じるのかわからずに。あの非合理な幸福感がおそらく悪から免れた人間の正常な状態なのだろう、と今日ぼくは思う。人間がもし神に帰るなら知るであろう幸福感、とぼくは言いたい。それから何度か、ぼくは今述べたような瞬間を知った。それは外部の情況に決して係りのない瞬間である。まさしく、それが、普通の幸福の瞬間とそれらの瞬間を区別するのだ。すなわち、ぼくが幸福だったのは、天気がよかったからでも、すべてがうまく行っていたからでもない。

それは、ぼくが理解しなかった、また今もなお理解していない、他のことのためにだった。ぼくはいつも驚きさえした、この感情が純粋に人間的な感情と、たとえば人間的な愛が与える幸福感と、ほとんど関係がないことに。ぼくはそれをその極度の重々しさのために、またその起源の神秘さのために、宗教的と呼ぶ。（3）

これは神秘体験としては典型的なものであろう。まず、ウィリアム・ジェイムズが言う一番目の特徴「表現不可能性」として、グリーンは、「ぼくは言葉では表現できないその状態のうちに数分間とどまっていた」と語っている。また、二番目の特徴である「認識的性質」としては、「あの非合理な幸福感がおそらく悪から免れた人間の正常な状態なのだろう」、「人間がもし神に帰るなら知るであろう幸福感」と言っている。これは、まさしく、ウィリアム・ジェイムズが「神秘的な状態は比量的な知性では量り知ることのできない真理の深みを洞察する状態である」と言っている通りである。さらに、三番目の特徴である「暫時性」（＝「神秘的状態は長い時間つづくことはできない」）もはっきりと現われている。すなわち、この神秘体験は「数分間」しかつづかなかったのである。さらに、第四の特徴である「受動性」も明瞭に見て取れる。すなわち、この神秘体験は、グリーンが何かをしたから起こったのではなく、「突然ぼくを襲った」のであった。「天気がよかったからでも、すべてがうまく行っていたからでもない」「それは外部の情況に決して係りのない瞬間」であった。グリーンはここで神秘体験に対して徹底的に受動的である。神秘体験は、いわば「向こう」からやってくるのだ。（4）

典型的な神秘体験として、次に、グリーンが１４歳の時にした体験をあげてみよう。

父とぼくは同じ寝室で寝ていた。ぼくは寝台に横になっていた。父はお祈りを唱えていた。突然、ぼくはある言うに言われぬ幸福感、ぼくをぼく自身から引き離す魂の幸福感に捉えられた。数分間、ぼくの心は神によってのみ占められていた。（中略）ぼくの思念はふだんのように右往左往する代りに、ぼくが以来もう二度と感じたことのない一種の恍惚のうちにあって動かなかった。（中略）魂が神の全能の大きな翼の下に避難するとき享受するあの言葉に尽くしがたい平和。（5）

まず、第一番目の特徴「表現不可能性」として、「言うに言われぬ幸福感」と言っている。次に、第二番目の特徴「認識的性質」として、「ぼくの心は神によってのみ占められていた」「魂が神の全能の大きな翼の下に避難するとき享受するあの言葉に尽くしがたい平和」という表現がある。これは、まさに、「照明であり、啓示であり（中略）、意義と重要さとに満ちている」（6）。また、第三番目の特徴「暫時性」として、「数分間」それがつづいたと書かれている。さらに、第四番目の特徴「受動性」として「突然、（中略）幸福感に捉えられた」「ぼくの心は神によってのみ占められていた」と語られている。

ウィリアム・ジェイムズによれば、「表現不可能性」と「認識的性質」という「二つの特徴があれば、どんな状態でも、私が用いるような意味では、神秘的と呼んでいいであろう」と述べている。上にあげたジュリアン・グリーンの神秘体験は二つの特長のみならず、「暫時性」と「受動性」の二つも加えた四つの特徴を全てきれいに備えているので、疑いもなく「神秘的状態」すなわち「神秘体験」と呼ぶことができるだろう。

それでは、ジュリアン・グリーンはなぜ、このように数多くの神秘体験を経験することができたのだろうか？ジュリアン・グリーンが最初に神秘体験をしたのは５歳の時であるから、なんらかの「修行」の結果として神秘体験をするようになったわけではない。それは、むしろ、グリーンが生来そなえていた資質によるところが大きいと思われる。その資質とは、まず、グリーン自身が言っている「超過敏性(hypersensibilité)」である。グリーンは幼少の頃から感受性が著しく過敏で、五官では捉えられないものを感じていたようである。この「超過敏性」によって、物理的次元を超えた世界の情報をキャッチすることができたと思われる。

そのため、彼は、しばしば「なにか」または「だれか」を感じることがあった。こうした「不可視」の存在に対する言及は、日記や自伝に夥しい頻度で見られるのである。

たとえば、小さい頃のことを回想して、彼は次のように書いている。

私はこわがるべきではなかった。なにもいないと、母はいっていたのだ。が、なにかいた。アンヌの部屋に、風呂場に、そして、家主の庭を見下ろすエレオノールの部屋になにかいたし、私が両親と休む部屋にもなにかいたのである。（7）

ここで言及されているのは「悪しき存在」であるが、一方で、当然のことながら、「善き存在」を感じることもあった。次に引用するのは、グリーンが３５歳の時、１９３５年１０月２８日の日記である。

ぼくたちは五人そろって食堂のテーブルのまわりに坐っていた。薪が暖炉のなかで燃えていた、暗かったので、まだ午後二時になっていなかったにもかかわらず、灯を点けなければならなかった。ぼくたちは五人で、笑っていた。そのとき、不意にぼくたちの数が増すのをぼくは感じた。ぼくたちの陽気さが、欠けている人たちを、父を、母を、そしてぼくが失った二人の姉たちを招き寄せたのだ。彼らはぼくたちの傍に坐って、食事の終わりまでぼくたちの相手をしていた、ぼくたちといっしょになって笑いながら。ぼくはこよなき幸福のひとときをもった。深い安心感。しかし、ぼくはそれについてあえてひとことも言わなかった。（8）

ここで、グリーンは、すでに亡くなった両親と二人の姉が、あの世から戻ってきて、食事をするグリーンたちの傍らに座っているのをはっきりと感じ取っている。

このように、そこにいるはずのない存在を感じ取る能力を持つ一方で、グリーンは「ヴィジョン」をありありと見る能力を備えていた。たとえば、彼は１５歳の頃を回想して次のように書いている。

私がなにか想像すると、それはちょうど妄想家が幻を見るように、私にははっきりみえるのであった。（6）

また、グリーンは、小説を書く際に、登場人物たちがが心の中にはっきり「見える」、としばしば言っている。

以上に述べた「超過敏性」と「ヴィジョンをありありと見る力」が、生涯にわたって、グリーンに、豊富な神秘体験を経験させたものと考えられる。

それでは、これから、さらに詳しくグリーンの神秘体験について述べていきたいと思う。

II　神秘体験（１）　――愛の直接体験――

グリーンが、しばしば言及している神秘体験として「愛の直接体験」がある。そこで、まず、「愛の直接体験」について考察してみよう。

グリーンが最初に神秘体験をしたのは、なんと、わずか５歳の時であった。その時のことを、グリーンは７８歳の時に行なったマルセル・ジュリアンとの対話の中で次のように語っている。

> マルセル・ジュリアン　あなたの本に書かれているあのまばゆいような体験をされたとき、つまり、ごく幼いころ、星のまたたく夜空と向きあいながら、あれほどの落ちつき、安らぎの印象を感じ、まさしく自分の世界に身をおき、存在しているのだと確信をもたれたとき、あなたはまだプロテスタントだったのですね。
>
> グリーン　五歳でした。私はじつに強い印象を受けました。安らぎだけでなく、愛の印象です。たしかに愛といわねばなりません。ひとりの人が……いきなり私を包んでいるという印象でした。やさしさと愛からなる何らかの存在です。（9）

この時の経験を、グリーンは自伝『夜明け前の出発』の中では次のように語っている。

> 両親と私が休む部屋でのことだ、ガラス窓のほうへ顔をあげた私は、そこに、星のいくつか輝く暗い空を見つけたのだ。（中略）明かりのないその部屋に、私はひとりだった。そして、空を見あげ、熱烈な愛というほか呼びようのないものを感じたのだ。私はこの世で愛しはしたが、一度だって、この短い時間にお

けるように愛したことはなかった。それでいて私は、自分がだれを愛しているのかは知らなかった。が、そこにだれかいて、そのだれかが私を見、やはり私を愛してくれているとはわかっていたのだ。（中略）とにかく、そこにだれかいて、無言のうちに私に話しかけていたことだけはたしかなのだ。（１０）

この「やさしさと愛からなる何らかの存在」、「私を愛してくれているだれか」、「無言のうちに話しかけていた」存在とは、いったいいかなる存在なのだろうか？

この名付けようのない「存在」はまた、「誰か」と呼ばれることがある。グリーンは、小説を書く時に、ほとんど自動書記と言ってもいいほど自動的にペンが走る経験をよくするのだが、その「自動書記」に関して、１９９３年にイタリア人のジャーナリストから質問されて、次のように答えている。

私は、自動書記について、次のように答えた。すなわち、私は作品を書いている最中に、あるいは作品を書いた後で、目に見えない誰かが私のそば――少しはなれたところ――にいるのを感じると。私は、その存在を見ることはできないが、確かに感じるのである。（１１）

また、グリーンは過剰な想像力を持っていたために、いったんそれがネガティブに働き出し、暴走し始めると、やがてそれは恐怖症になってグリーンを苦しめることになる。

次に引用するのは、グリーンが梅毒恐怖症になって苦しんでいた時に、「誰か」がそばにいるのを感じ、それと同時にその恐怖症から瞬時で癒される、という経験をしたことを述べた箇所である。

ぼくが九月にかかったと考えているあの病気のためにこの数日大いに苦しんだ。ぼくが医者に会いに行くと、彼はぼくに言った、「何から、私があなたを治療してあげればいいのですか？　あなたはどんな病気にもかかっていませんよ、全然。」けれども、ぼくは自分が冒した危険の重大さに目をつむっていることはできない。そのことを医者に話すが、しかし、彼によれば、ぼくはただ彼が梅毒恐怖症と名付けているものに苦しんでいるだけである。医者はぼくに断言して、それは一時的な固定観念であると言う。（中略）ほぼ一週間のあいだ、ぼくはまだ経験したことのない苦悶のうちに過した。それから、昨日、恐ろしい不安のとりことなって寝台の上にいたとき、ぼくは突然部屋に誰かがいるのを感

じた。ほとんど同時に、ある内部の声がぼくに非常なやさしさと絶対的権威とをもって話しかけた。ぼくはただちに起き上った。治った。幸福だった。名付けようのない幸福感。（１２）

また、グリーンは次のような経験もしている。

先夜、説明できない唐突な動作で、そう、まるで後ろから押されたかのように、ぼくは窓の前に跪いた。なぜ、そこに？　わからない。黄色のカーテンが引かれていた。家にはぼくだけしかいなかった。けれども誰かが一分近くもぼくの後ろに立っていた。
ぼくの人生で、その現実性がこれほど確実に思われる出来事はない。ぼくは時間が過ぎるのを止めるためのように息を止めていた。そして、それがぼくに言えるすべてのことで、他はわれわれの言葉を越えている。（１３）

この経験がことのほか印象的なのは、実は、その前夜に次のようなことがあったからである。

前夜、引出のなかに何かを探していたとき、ぼくはそこに数珠を見て、十五歳のときの祈りを唱えることをとっさに思いついたのだった。ぼくは「父なる……」と言ったが、それ以上先へは行けなかった。語を発音することができないのだった。ぼくは数秒経つがままにしておいてから、茫然自失して、「アヴェ……」と言ったが、そこでも、同じ困難にぶつかった。どんなに努力しても、声がひとことも喉の奥から出てこない。不安よりは悲しみから、ぼくはこの試みを断念すると、寝た。翌日、ほぼ同じ時間に先に語ったことが起ったのだ。（１４）

こうした「存在」または「誰か」とは何なのだろうか？　それを知るためには、まず、グリーンが愛について言及している箇所を参照する必要があるだろう。１９９７年という最晩年に、グリーンは日記の中で愛について次のように語っている。

私の存在は、頭から足まで、愛で――愛のみで――満たされており、その満たされ具合は想像もつかないくらいである。愛以外のものが、私の中に存在す

る余地はない。俗な表現を使うとすれば、私は愛を「売るほど持っている」。私はその愛を神だけに捧げたかった。しかし、それがかなわなかったので、私は、人間たちに、私が持っている、もっとも真実なもの、もっとも良質なものを与えてきたのだ。（１５）

また、一方で、愛について『夜明け前の出発』の中で次のように語っている。

この世のなかで、私たちのもっとも重大な行為は、愛するということだと思う。その他のことはあまり問題ではないのだ。（１６）

さらに、『終末を前にして』の中で、愛と神との関係に言及して次のように語っている。

神は愛である。この言葉を口にしたなら、人はもう万事を語ったことになります。愛なくして宗教もなく、同様に人生も存在しません。（１７）

以上の発言に加えて次の発言を総合して考えた時に、はじめて、ジュリアン・グリーンが五歳の時にその臨在をありありと感じた「存在」がいったい誰なのかがわかるだろう。

キリストはまず、そしてとりわけ、生きた人格だった。絶えず私を見守っており、私のそばからはなれたことはなく、いつも私を所有している存在であった。福音書のなかに現われるとおりに、大変身近な存在でありながら、だがしかし、不可視の世界に身をひそめていた。私が声高に話しかけると、キリストは私の言葉に耳を傾け、不可視の世界から沈黙による答えを与えてくれた。この沈黙こそ、ただ騒音が消えただけの普通の沈黙とはちがい、一種の言語、神の言語であり、まさしく人の心に聞えてくる言葉なのであった。（１８）

つまり、グリーンが五歳の時に感じた「やさしさと愛からなる何らかの存在」、「私を愛してくれているだれか」、「無言のうちに話しかけていた」存在とは、神すなわちキリストであった、ということになる。

ここで問題になっているのは、神について語ることではない。神の臨在を経験

すること、神を実体験すること、神を生きることなのである。

まさしくここに、神秘家としてのグリーンの真骨頂があると言えるだろう。グリーンは、五歳の時に、愛を、そのもっとも純粋な形、そのもっとも強烈な形で実体験したのである。

III　神秘体験（２）　――とてつもない幸福感――

次に「とてつもない幸福感」という神秘体験について考察してみよう。「幸福感」がどうして「神秘体験」なのか、と疑問に思われる向きもあろうが、グリーンが経験した幸福感は尋常の幸福感ではなく、想像を絶したすさまじいまでの幸福感なのである。

すでに引用した８歳の時の幸福感についで、グリーンは９歳の時にも強烈な幸福感を体験している。アンドレジイのセーヌ河岸にある小さな別荘に滞在している時のことだった。

> 私は淡い黄土色に塗った壁のそばにいて、その壁を見ていると、突然いいようのない幸福感に襲われ、その結果私はわれを忘れ、自分がどこにいるかもわからなくなった。それは、（中略）いってみればどこからともなくやってきて、木々の間を吹き抜ける風のように魂の間を通り抜けていく、いわれのない幸福感であった。（中略）それから受けた印象は非常に強烈だった。（１９）

この時の幸福感は、「われを忘れ、自分がどこにいるかもわからなくな」るほどの強烈な幸福感だった。これは「法悦」、「陶酔」、「歓喜」とでも言うべきほどの経験だったのだろう。

さらに、１３歳のころには、かなり持続的にそうした「歓喜」、「熱狂」にとらわれたという。

> この一九一三年春というのは、私の記憶のなかに、私の人生のもっとも熱狂的時期のひとつとして残っている。私は、まだ日があるうちに家に帰ったが、木の葉におおわれた田園を見ると、突然の歓喜に襲われたものだ。木曜日の午後には、一種の声なき熱狂にとらわれて、庭の芝生の上をころげ回った。（中略）これほどの幸福を、私はどうしていいかわからなかった。（中略）もはや私には、

自分が自分のようには思えなかった。まさしく、目に入るすべてになりきっていた。私は空気であり、空間であった。（２０）

ここでは、幸福感は自然との交歓がきっかけとなっているように思われる。また後ほど述べることになる神秘体験「万物との一体感」も見られる。次に、グリーンが１６歳の時に経験したことを見てみよう。

あおむけになって寝ていると、いうにいわれぬ幸福感が、私のからだ中を浸したのだった。この世に重くのしかかる不吉な気配はもはやなく、悲しみもまた突然に姿を消し、深い、まったき安心感に包まれて、すべてが喜びに花開いたかのように思われた。この状態がどれくらい続いたかは覚えていない。神のことは頭になかった。なんのことも考えていなかった。実をいうと、考えるという機能がとまり、自分がだれなのかも忘れさっていたのである。（２１）

これらの体験に特徴的なのは、「自分がどこにいるかもわからなくなった」、「われを忘れ、自分がどこにいるかもわからなくなった」、「自分がだれなのかも忘れさっていた」という自我消失の状態である。これは、ヒルティーが言っている「本格的自主性の感じが失われた」状態であると見なしてよいだろう。この１６歳の時の経験は、ヒルティーが『幸福論』の中で言及している神秘状態ときわめてよく似ている。

ひとが決して放棄したがらぬあの人格的自主性の感じが失われた代償として、人生における一切の恐怖心が消滅し、なんとも名状しがたい内心の安心感が生じる。これはみずから経験するしかないものであるが、ひとたび経験すれば、けっして忘れることのできないものである。（２２）

グリーンはさらに１９１７年に、冬のミラノで「言語を絶した」歓びを感じている。この時の幸福感は、グリーンの人生において、最も強烈なものであったらしい。

１９１７年１１月の始めに、私はミラノにいた。凍りつくようなある夜、私は、そこ、ミラノで、言語を絶した幸福を経験したのだ。これほどの幸せは、

私の一生で、たぶんこの時だけだろうと思う。私は、幸福で、幸福で、もうどうしようもなかった。しかし、それまで一度も訪れたことのないミラノで、どうしてそんなことが起ったのだろうか？　ミラノは、私にとって初めての都会だった。しかし、そのとき私がハートに感じた歓びは、それまで私が経験したあらゆる喜びを超えていた。完全に純粋な歓び、名状しがたい歓び。その歓びは、私の全身を駆けめぐっていた。（２３）

これこそまことの神秘体験と呼ぶべきものであろう。次に、少し時間を飛ばして、３３歳のころにグリーンが感じた幸福感を見てみよう。

人が愛し合うと呼んでいるもの、それはもっともしばしば幸福の戯画にすぎない。幸福はそれよりはるかに大きく、はるかに深く、はるかに単純である。単純であるからこそ、それは分析されないし、描かれない。幸福は語られないが、しかしそれが明白な理由なしにわれわれを襲う瞬間はある。病気のもっともひどいときとか、牧場を散歩しているときとか、暗い部屋のなかで退屈しているときとかに。そんなとき突然、ひとはいわれなく自分を幸福に感じる。そのために死ぬほど幸福に、すなわち、その常ならぬ瞬間を無限にひき延ばすために死にたいと思うほど幸福に。（２４）

「そのために死」にたくなるほどの幸福、「その常ならぬ瞬間を無限にひき延ばすために死にたいと思うほど」の幸福とはいかばかりの幸福であろうか？　グリーンの人生の様々な瞬間に与えられたこれらの幸福とは、聖なる存在から与えられた幸福、神から与えられた幸福、恩寵としての幸福に他ならないのではないか。

そうした「神秘的な出来事」としての幸福、もはや「人間的な歓びではない」幸福は、グリーンが３７歳のころにも体験されている。

ぼくはとても仕合せに感じたので、ひととき幸福の近くにいるのを感じた。幸福、けれども、ふつうひとが幸福という言葉によって言い表しているものとはほとんど関係のないあの神秘的な出来事にぼくが与えることのできる唯一の名。それは人間的な歓びではなく、人間的な歓びがときにそれに導くのだ。ぼくが言いたいことを説明するのは不可能だ。この、言葉には言い表し得ない何かが、そこ、この世界の厚みの背後にあった。が、ぼくはそれに到達しようと努めな

かった。このような場合、一種の心理的不動性、絶対的な受動性を保たねばならないことを、ぼくはあまりにもよく知っている。（２５）

この経験においては、ウィリアム・ジェイムズが神秘体験に与えた四つの特徴のうち、四番目の「受動性」がきわだって強調されていることに注目しよう。グリーンは、こうした神秘体験が「絶対的な受動性」を保つ中においてこそ与えられることを「あまりにもよく知っている」。

また、この経験において、「幸福」が「この世界の厚みの背後に」ある何か、「言葉には言い表しえない何か」である、と言われていることもきわめて重要である。これまでの文脈からすると、この「幸福」と「愛」と「神」が、それぞれイコールで結ばれることになるからである。

「幸福」＝「愛」という図式は、上記の経験よりも少し後、同じく３７歳のころに経験された神秘体験にも共通している。しかも、こちらの経験においては、「ぼく自身の心の奥で何かがぼくに……海岸に行くようにと言うのを聞いた」とあるように、ある種の霊的な啓示も受けていると考えられる。

昨夕、夕食時に、ぼくは突然あの名づけがたい不思議な幸福を感じた。ぼくは窓ガラスの後ろに薄黄色の砂浜とトルコ石のような青緑の海とを見ていた。そのとき、ぼくはぼく自身の心の奥で何かがぼくに日が暮れたら海岸へ行くようにと言うのを聞いた。ぼくの心臓は激しい動悸を打ち、ぼくはぼくの感動をかくすのに苦労した。ぼくは自分の部屋へもどった。ぼくは暗くなるのを待った。空は端から端へかけまわる長い稲妻によって切り裂かれていた。ぼくは誰にも気づかれないのを幸い、裸足で海岸へ出て行った。（中略）ぼくはしばらくそこにとどまっていた、深い安らぎのなかで、心を愛でいっぱいにして……　しかし言葉に表すことのできないものについて語って何になる？（２６）

ここでも、強調されているのは、神秘体験を言語化することはできないということである。

さらにグリーンは１９３７年７月１４日にアメリカに向う船の中で「大きな歓び」を感じるという神秘体験をした。しかも、この時は、通常、耳では聞くことのできない「栄光の讃歌」を聞くのである。そして、はっきりと「幸福」が「超自然の一要素」であると言っている。

月曜日の午後、船が一晩停まっていたル・アーヴルを離れたあと、（中略）寝台の上に横になっていた。そのとき突然、静寂の深みに、（中略）ぼくの耳はたくさんの人々が非常に遠いところで叫んでいるような奇妙な音をとらえた。次いで、ぼくには人々が歌っているように思われた。幾千もの声がひとつになって歌っているのだが、しかし、ただひとつの、つねに同じ楽音を歌っているのだ。（中略）それはまったき音楽だった。その同じ瞬間に、ぼくは大きな歓びに我を忘れた。全宇宙が幸福としか呼びようのない超自然の一要素のうちに浸っているように感じた。そして、その幸福のうちにすべてが無に帰した。三、四分間、ぼくはその栄光の讃歌のようなものを聞いていた。（中略）ぼくの不安はすぐに消えた。今日ぼくは自問した、われわれの眼から真実を隠している触知できないヴェール、ヒンズー教徒がマヤと呼ぶヴェールがほんのわずかなあいだ破れたのではなかったか。そして、偶然ぼくはそこにいたのだ！（２７）

この時期、グリーンは仏教やヒンズー教を深く学んでいた。したがって、そうした東洋的な考え方がこの箇所にはうかがわれるが、それにしても、宇宙全体を満たしている幸福感を感じ取ったのは、いかにも壮大な神秘体験であると言える。「その幸福のうちにすべてが無に帰した」という表現は、仏教で言う「涅槃」を想起させるだろう。

この時、グリーンはアメリカに行くことに不安を感じていたのだが、この神秘体験をすることによって、そうした不安が一気に消滅してしまったのである。

この時感じた「歓び」を確認するかのように、二週間ほど後の７月２７日に、グリーンは次のように書いている。

ぼくたちはそれぞれ偽りの神々、すなわち地上のあらゆる幻影を追っている。過ぎゆくもののなかに、ぼくたちの歓びを求めながら。超自然的でない歓びはすべて真実ではなく、永久ではないのに。（２８）

ここで、グリーンが言っているのは、「超自然的な歓びこそ真実であり、永久なのだ」ということである。では、「超自然的」とはどういう意味だろうか？　それは、「物理的次元を超えた領域に関わる」「我々が現実だと思っている世界を超えた領域に関わる」という意味であろう。

グリーンは、しばしば、我々が現実だと思っているこの「現実」は、決して確かなものではなく、本当に実在しているとは言えない、むしろ、心の中の「現実」こそが本当の現実であって、そちらの方こそが真実の世界なのだ、という感想をもらしている。つまり、物理的世界は実在していない、思いの世界こそが本物であり、永遠なのだ、と考えていた。これは、神秘家として、当然のことであろう。

そして、１９３９年の日記の中で、そうした「神秘家」に関して、きわめて示唆的なことを言っている。

一体、あなたは何を見たのか？　これは信仰をもった人間がみな恍惚にとらえられた神秘家たちにする質問である。しかし、霊的な領域からもどってきて、口ごもる以外のことができる瞑想家はほとんどいない。彼らがみたものはいかなる言葉にも表現されないのだ。ただ彼らの顔のみが、彼らを包んでいた光の何かを保っている。ある言い表し得ぬ幸福が神を愛する者を待っている。（２９）

グリーンもまたこうした「神秘家たち」の一人であることは疑い得ない。そして、この短いパッセージの中には、神秘体験に関するテーマが驚くほどの密度で凝縮されている。

すなわち、さきほど、「超自然的」という言葉を説明したが、実は端的に言うと、「超自然的な世界」とは、「霊的な領域」＝「光に満たされた世界」なのである。そして、神秘家たちは、「霊的な領域」に参入することによって、「言語を絶する歓び」を感ずるのであり、そのためには、「瞑想」と「神を愛する」ことが不可欠である、ということになる。グリーンは、まさに、神を愛することによって言い表しえぬ幸福を感じ続けた神秘家だったと言えよう。

彼は、「神」について、また「愛」について、そして「幸福」について、次のように語っている。

神が存在しないかもしれないという考えは、いまだかつてただの一度もぼくの心をかすめたことはない。（３０）

われわれが投げ込まれている幻影に満ちた混乱のなかに、ひとつ、いつまでも真実のものがある、愛だ。他は虚無にすぎない。（３１）

ぼくはある幸福を享受している、その実在がぼくにはぼく自身の実在と同じよ

うに明らかである幸福、すなわち愛を。結局、ぼくは超自然の世界を信じていて、その世界のなかに、この物質の世界は、もしそう言えるなら、沈められ、かつ侵されているのだ、いたるところから。（３２）

Ⅳ　神秘体験（３）　――意識の拡大――

a)　過去の出来事を感じる

意識が拡大することによって、グリーンは、自分が体験したはずのない過去の出来事をありありと感じることがあった。その典型的な例をあげてみよう。

イギリス人が歴史的感覚と呼ぶものを、ぼくはときとしてもつ、しかし束の間。だからそれはかなり稀な天賦の才だ。ぼくが言いたいのは、ときどき、ある声を聞いたり、ある家を見たりすると、大昔にある場所で起こったかもしれないことを正確に感じる（あるいは、感じると思う）ということだ。ぼくは思い出す、ある日、サン・ジョルジョ・デリ・スキアヴォニに、ロベールといっしょにいたとき、ぼくはこの礼拝堂に宿っている過去をすっかり感じた。外では、子供たちが教会堂のまわりの走りながら叫んでいて、その声が唐突にぼくを以前へ、三世紀以前へ運び去ったのだ……（３３）

こうした過去の出来事は、通常の五官では感じ取ることができない世界なのだから、やはり神秘体験であると言っていいだろう。過去を感じるこうした「天賦の才」は、小説家としてのグリーンを支える稀な能力だったと思われる。グリーンはよく、書いている小説の「場面がありありと見える」というようなことを言うが、それは、もしかすると、実際にあった過去の場面だった可能性もある。ここに、神秘家と小説家が幸せな結婚をした例があると言えるだろう。

b)　万物との一体感を感じる

グリーンにおいて、意識の拡大は、単に時間の面において見られるのみならず、空間の面においても見られる。あまりの幸福に満たされると、自我が消滅し、自分が自分でなくなり、万物との一体感が生じるのである。

私は、まだ日があるうちに家に帰ったが、木の葉におおわれた田園を見ると、突然の歓喜に襲われたものだ。木曜日の午後には、一種の声なき熱狂にとらわれて、庭の芝生の上をころげ回った。（中略）これほどの幸福を、私はどうしていいかわからなかった。（中略）もはや私には、自分が自分のようには思えなかった。まさしく、目に入るすべてになりきっていた。私は空気であり、空間であった。（３４）

この感覚はさらに拡大し、自分が宇宙の一部であると同時に、自分のうちに宇宙があるという感覚にまでなる。ここでも自分を消すことがテーマであり、そしてそれはとてつもなく甘美なことであり、とてつもなく幸福なことなのである。グリーンはそれを、おそらく、死の向側で我々を待っている世界であると考える。

ぼく自身とその風景とのあいだにきわめて深い調和が存在していたので、ぼくはかつてのように自問した、そのすべてのうちにちょうど海のなかに消える一滴の水のように自分を消すことは、肉体をもうもたないことは甘美ではないか、と。とはいえ、ただこう考えることができるだけの意識は残して――「ぼくは宇宙の一片だ。宇宙はぼくのうちにあって幸福だ。ぼくは空だ。太陽だ、木々だ、セーヌ川だ、川を縁どる家々だ……」この奇妙な想念がぼくから完全に離れ去ることはなかった。結局それはおそらく死の向側で待っているある種の何かだ。そして突然ぼくは自分を非常に幸福に感じた。（３５）

c)　人類との一体感

意識の拡大によって万物との一体感を感じる一方で、グリーンは、また、人類との一体化も感じる。

すべてが心から来る、人間的なものから来る。人間的なものは、あらゆる人間的なものは、ぼくたちのうちに、ぼくたちがまったくよく知らないぼくたち自身の心の底にある。おのおのの人間が彼ひとりで人類全体なのだ。（３６）

この意識はさらに明確に語られることになる。グリーンはあるとき、先史時代美術館を訪れ、様々な展示品を見た後で、次のような感慨に浸るのである。

ぼくはこのように遠い時代のこれらすべての漂流物を前にして、ある奇異な印象をもった。ぼくのなかを通って、人類全体がまるで大通りを過ぎるように過ぎて行くというそんな印象を。人類全体がぼくであり、ぼくが人類全体なのだ。ぼくは人類がはじめて雲のほうへ眼を上げた日に存在していたし、また、もし人類の最後があるなら、最後の日まで人類のうちにいるだろう。ぼくが死ぬことはあり得ない。（中略）ぼくが生きると呼ぶことは、人類が、自分自身についてもっている意識以外の何ものでもない。ぼくはこの感情をきわめて強く感じたので、ぼくたちの死ぬという恐怖が、不意に、かつてぼくたちが苦しんだもっとも悲劇的な誤解のひとつに思われた。それはぼくたち自身とぼくたちの肉体とのあの不幸な混同から来るのだ。（３７）

この「人類全体がぼくであり、ぼくが人類全体なのだ」という意識の状態は、まことに壮大な意識状態である。しかも、この拡大された意識状態を通して、グリーンは、「死の恐怖」が「悲劇的な誤解」にすぎない、ということを悟っている。死の恐怖は、肉体と自分自身を混同することから来る、という高度で明晰な気づきを得ているのである。

d)　体外離脱

グリーンが始めて体外離脱を経験したのは、もうすぐ８歳になろうとする１９０８年の６月のことであった。この不思議な経験は、一生のあいだ、もっとも特異な瞬間として長くグリーンの記憶にはっきりと残ることになる。

その時、グリーンは教室の窓際の席にすわり、開いた窓から、少し離れたところにある歩廊の小さなブリキの屋根を眺めていた。そして、その屋根を見ながら、自分自身から抜け出していったのである。

開いた窓からは、鉄の小円柱を持つ歩廊の小さなブリキの屋根が見えた。その向うには、細長くそびえたつ赤レンガの建物と、葉の萌えだしたばかりのプラタナスの木の枝があった。が、私が特に覚えているのは、ブリキの屋根のほうだ。というのも、私が自分自身から抜け出していったのは、この屋根を見ながらだったからだ。数分の間、たしかに私は、自分の周囲に見える世界とはちがう、別の世界にいた。その別の世界こそ、真のものだという確信が持てた。私はそうしたことに幸福を覚えた。が、その幸福感について語ろうとは思わな

い。明らかに、人間の言語の限界を越えているように思えるからだ。それは、それまでに知り得た快いものすべてとは、どの点においても比較できなかった。（３８）

物質の世界を超える別の世界――霊的な世界――にいる時、グリーンはそれまでに知り得た幸福とは比較できない、言語を絶する幸福に満たされる。この世界にいる時の幸福感は、物質世界を描写するために創られている言語ではとうてい描写することも、説明することもできないのである。

この体外離脱は、さらに１９３５年の１０月にも起こっている。

アントワープで、明け方、まだ半ばまどろんでいたとき、なぜか、ぼくはこの世の王国という言葉を考えた。すると、突然、ぼくは大地の上、恐ろしいような高みに昇っていた。ぼんやりと光っているいくつかの大きな斑点が町のありかを示していた。それは暗い砂浜のくらげのように鼓動しているように見えた。曙光のなかで。（３９）

Ⅴ　神秘体験（４）　――真の自己との出会い――

神秘家であるジュリアン・グリーンは心の中にすべてがあることを知っている。心は、宇宙全体を包含しているのだ。心の中には、また、あらゆる人間的なものがある。

すべてが心から来る、人間的なものから来る。人間的なものは、あらゆる人間的なものは、ぼくたちのうちに、ぼくたちがまったくよく知らないぼくたち自身の心の底にある。（４０）

そして、心の奥底には、「真の自己」が潜んでいるのだが、私たちはなかなかその「真の自己」と出会うことができない。「真の自己」とは、「ぼくたちの奥にひそみ、そしてぼくたちを大いなる光のほうへ導いてくれる誰か」（４１）である。

グリーンは日記の中で「真の自己」を「男」と呼んで、次のように述べている。

ぼくのなかには目を醒ましたくて仕方ない眠っている男がいて、彼は自分が自由になる日を夢見ている。彼を眠りの牢獄に閉じ込めているもの、それは快

楽への永遠の渇望だ。ときとして、ある声がぼくに何ごとかを叫ぶように思われる。そんなとき、もしぼくが聴くとしたら、ぼくの解放は多分なしとげられて、精神がぼくを導くだろうに。その叫びのやさしさはこの世界のあらゆるものを忘れさせる。そして、ぼくのうちにひきとめておくことができるのは愛しかない。なぜなら、その愛こそはぼくの人生においてぼくがもっている最良のものなのだから。今日、ぼくは精神がおのれの言うことを聴くことをぼくに命じるとき精神に従う決心をした。（４２）

この「男」が目覚めるのを邪魔しているのは、「快楽への渇望」である。すなわち、仏教がいうところの「執着」である。この執着を断つことによって、この「男」すなわち「真の自己」が目覚めて、私たちに語り出す。

グリーンは「執着」を絶つことを、「花や歌」そして「岸」という比喩を使って、非常に巧みに、そして美しく描写している。

小舟のなかから花や歌とともに遠ざかって行く岸に向かって悲しみなしにさよならを言うこと。それこそが、解放された生だ。ぼくたちがこの地上で目を開けた日以来ぼくたちを呼んでいる幽大な故国を愛さねばならない。闇の向う側に、人間の言葉では描くことのできない光が輝いていることを信じなければならない。永遠なるものは幸いであり、そして永遠なるものはぼくたちのすべての心の奥に存在するのだ。他のすべては幻影でしかない。（４３）

花や歌のあふれる岸にさよならを言うことによって、つまり執着を断つことによって、私たちは「心の奥に存在する」「輝ける光」、「永遠なるもの」つまり「真の自己」に出会うことができるということだ。

この「真の自己」は神とつながっており、「神の愛を受けており」「神に直接話しかける」ことができる。したがって、私たちは、「真の自己」と出会うことによって、神と出会うことができるのである。

私たちの奥底には、つねにだれかが隠れていて、私たちはその存在に気づきもしなければ、そこに近づくこともできない、そしてその存在は神の愛を受けているのだ、ということである。その存在、つまりわれわれの真の自己は、神と関係を持ち、神に直接話しかけることができるのである。（４４）

ジュリアン・グリーンは、１９７９年に行なわれたマルセル・ジュリアンとの対話の中で、「真の自己」との出会いを果し、神と交わるに至った神秘家としての自分を、きわめて深遠かつ明晰な言葉によって説明している――神との一致それ自体は、けっして語ることができないと言いながら。

> 人は自分自身のうちに沈黙を形づくることに成功しない限り、神と交わりをもつわけにはいきません。とても困難なことです。自分の能力、自分のありように、あげて沈黙を強いるというのは……。一種の虚無に似たところにいたり着くことになります。あらゆる神秘家にみられるのはこれです。この瞬間、言葉を越えた神との一致があります。沈黙のなかでの、この合致の感情を経験した霊的な作家たちはいつも――この点ではみな同じ意見なのですが――事物そのものからきわめて遠くに身をおく結果、何が起こるのかを述べあらわすことは無理だといいます。これが、神の前での人間の沈黙なのです。（４５）

VI　結論

さて、これまで、ジュリアン・グリーンの様々な神秘体験を取り上げてきたが、これらの神秘体験に共通していることがあるように思われる。それは、神秘体験を経験しているグリーンが、同時に、「自我の滅却」あるいは「自我の溶解」とも言うべき経験をしていることである。

直前にあげた「神との一致」という神秘体験においては、沈黙のうちに「一種の虚無に似たところにたどり着く」と言っているが、これは自我が消滅した状態を「虚無」という言葉で言い表していると見ることができる。この「虚無」はキリスト教的な「無」あるいは仏教における「無我」ないしは「涅槃（ニルヴァーナ）」に相当すると考えられる。

他にも、この「自分がなくなった状態」、「われを忘れた状態」を、グリーンは次のような言葉を使って説明している。

「ぼくの周囲で起っていることがもう何もわからず」
「ぼくをぼく自身から引き離す」
「私はわれを忘れ、自分がどこにいるかもわからなくなった」
「自分が自分のようには思えなかった」

「すべてが無に帰した」
「私には、自分が自分のようには思えなかった」
「ちょうど海のなかに消える一滴の水のように自分を消す」

私が「小さな私」を手放して、私が私でなくなる時、私が無となる時、私は大いなる神と一致し、とてつもない神秘体験をするように思われる。

これは、「ヨーロッパ近代を汚染してきた自我の猛威」を乗り越える、ひとつの可能性に満ちた契機になるのではないだろうか。

自我を手放すことによって、心が不動の状態に入り、安らぎ、平安、幸福、喜び、愛、光を感ずる。そして、自己が不死であることを悟る。神と合一する。

一人の人間に起こったことは、また、すべての人間に起こり得ることでもあるだろう。

グリーンの経験は、彼だけに起こった特別なものではないと考えられる。

そこに、２１世紀に生きる私たちにとっての大いなる希望があるのではないだろうか。

最後に、数々の神秘体験を経験したグリーンが、最晩年に至って残した希望の言葉を掲げて、本稿を締めくくりたいと思う。

「私は人類である」のだから、「私の幸福」が、そのまま「人類の幸福」につながるはずである。

> 私たちが乗っている、ヨーロッパというこの列車が、やがて、「人類の幸福」という駅に到着することを私は望んでいる。「人類の幸福」とは、すなわちユートピアのことである、と言う人がいるかもしれない。ならば、私はそれをさらに言い換えよう。そう、ユートピアとは人類の希望でもあると。（４６）

注

ジュリアン・グリーンの作品の引用に関しては、すでに翻訳のあるものはそれらから引用した。ただし、主として文脈上の理由から、一部を、省略、改変、付加した場合があることをお断りしておく。

（１）W.ジェイムズ『宗教的経験の諸相（下)』桝田啓三郎訳、岩波書店、1970、p.183
（２）松本滋『宗教心理学』、東京大学出版会、1979、p.168。以後は、岩波版の訳語「言い表しようがないということ」の代わりに、こちらの「表現不可能性」を用いることにする。
（３）ジュリアン・グリーン『ジュリアン・グリーン全集　１４　日記**』、小佐井伸二訳、人文書院、1983、p.268
（４）以上、W.ジェイムズ『宗教的経験の諸相（下)』、p.183~185
（５）ジュリアン・グリーン『ジュリアン・グリーン全集　１４　日記**』、p.152
（６）ジュリアン・グリーン『夜明け前の出発』、品田一良訳、講談社、1967、p.242
（７）ibid., p.7
（８）ジュリアン・グリーン『ジュリアン・グリーン全集　７　日記*』、小佐井伸二訳、人文書院、1980、p.306
（９）ジュリアン・グリーン＋マルセル・ジュリアン『終末を前にして』、原田武訳、人文書院、1981、p.43
（１０）ジュリアン・グリーン『夜明け前の出発』、p.8
（１１）Julien Green, *Pourquoi suis-je moi? JOURNAL 1993-1996*, Fayard, 1996, P.15
（１２）ジュリアン・グリーン『ジュリアン・グリーン全集　７　日記*』、p.177~178
（１３）ibid., p.237
（１４）ibid.
（１５）Julien Green, *En Avant Par-Dessus les Tombes JOURNAL 1996-1997, Fayard*, 2001, p.193~194
（１６）ジュリアン・グリーン『夜明け前の出発』、p.26
（１７）ジュリアン・グリーン＋マルセル・ジュリアン『終末を前にして』、p.61~62
（１８）ジュリアン・グリーン『夜明け前の出発』、p.226
（１９）ibid., p.81
（２０）ibid., p.126

（２１）ibid., p.204
（２２）W.ジェイムズ『宗教的経験の諸相（下)』、p.34
（２３）Julien Green, *En Avant Par-Dessus les Tombes JOURNAL 1996-1997*, Fayard, 2001, p.175
（２４）ジュリアン・グリーン『ジュリアン・グリーン全集　７　日記*』、p.156
（２５）ジュリアン・グリーン『ジュリアン・グリーン全集　１４　日記**』、p.23~24
（２６）ibid., p.32
（２７）ibid., p.33~34
（２８）ibid., p.36~37
（２９）ibid., p.87
（３０）ibid., p.86
（３１）ジュリアン・グリーン『ジュリアン・グリーン全集　７　日記*』、p.99
（３２）ibid., p.63
（３３）ibid., p.208
（３４）ジュリアン・グリーン『夜明け前の出発』、p.126
（３５）ジュリアン・グリーン『ジュリアン・グリーン全集　７　日記*』、p.133
（３６）ジュリアン・グリーン『ジュリアン・グリーン全集　１４　日記**』、p.160
（３７）ibid., p.69~70
（３８）ジュリアン・グリーン『夜明け前の出発』、p.56
（３９）ジュリアン・グリーン『ジュリアン・グリーン全集　７　日記*』、p.306
（４０）ジュリアン・グリーン『ジュリアン・グリーン全集　１４　日記**』、p.24
（４１）ibid.
（４２）ジュリアン・グリーン『ジュリアン・グリーン全集　７　日記*』、p.303~304
（４３）ジュリアン・グリーン『ジュリアン・グリーン全集　１４　日記**』、p.47
（４４）ジュリアン・グリーン『夜明け前の出発』、p.20
（４５）ジュリアン・グリーン＋マルセル・ジュリアン『終末を前にして』、p.103~104
（４６）Julien Green, *Pourquoi suis-je moi? JOURNAL 1993-1996*, Fayard, p.21